

日本の伝統芸能「落語」が海外での日本語教育におよぼす効果

—オーストラリア・パースの公立学校での日本語指導に関する実践報告—

阪田 昌樹・松田 眞奈美・大内 幹雄

1. はじめに

筆者は2015年より3年間、兵庫県立大学大内幹雄教授の紹介で、夏休みを利用した「オーストラリア、パース公立学校ボランティア訪問」を実施してきた。2017年夏の訪問で3度目となるこの訪問は、当初、筆者（阪田、松田）が日頃アマチュア落語家として公演している「英語落語」を通してオーストラリアの学生たちに日本文化を紹介し、文化交流をするのが目的であった。しかしながら、高等学校で英語教師として教鞭をとっている筆者（阪田、松田）にとって、「日本文化紹介」は訪問の意義としてはものたらないものであり、2年目は現地の学生に「英語落語（小噺）」を体験してもらい日本文化を広めること、そして3年目には「英語落語（小噺）」指導のノウハウを現地の日本語指導に応用させ「オーストラリア学生による日本語落語（小噺）発表会」の実施へと変化していった。本報告では、実際に落語指導を受けたオーストラリア学生へのアンケートの結果から、日本の伝統芸能「落語」が現地の日本語教育にどのような影響をおよぼしたのかを報告するとともに、海外での日本語教育に落語を取り入れることの可能性と意義について、今後の展望や課題をまとめたいと思う。

2. 英語落語を取り入れた授業実践

「英語落語を通じた英語指導」は3年前から筆者（阪田、松田）が勤務校で実践している取り組みであり、公立高校の「英語表現Ⅰ」の教科書を使いながら同時に毎レッスン「英語落語（小噺）」を紹介し、練習することで学習事項を定着させるこのスタイルは、当校1学年教育課程の特色の一つとなっている。英語落語は「人前で感情を込めて発表する」ための格好の教材であり、このことは現行高等学校学習指導要領解説「英語表現Ⅰ」の目標にうたわれている「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を養う」ことにも有効であると考えられる。またその教育的効果について、藤澤・北川（2010）によって「学生の（英語に対する）『自信力』をつけさせる上で有効である」こと、阪田（2010）によって「英語での発表に対する興味・意欲が向上すること」、「言葉を正確にかつはっきりと発音することができるようになる」ことが報告されている。筆者（阪田、松田）は毎学期末に授業成果発表会としてクラス代表生徒による「英語落語（小噺）発表会」を実施しているが、オーストラリア学生のパースでの「日本語落語（小噺）発表会」は、そのノウハウを利用したもので、授業の手順、発表会の方法など、すべて日本での英語教育の授業実践に基づいている。

3. オーストラリア・パースへのボランティア訪問

（1年目）

期間：2015年8月8日～14日、訪問場所：兵庫文化交流センター、カーティン大学、ヘイルスクール
内容：「英語による落語の紹介」「英語落語2～3席」「ワークショップ（体験講座）」など
→兵庫文化交流センターでは毎週土曜日近隣住民や日本語補習校の保護者が集う「チャターボックス」にて、カーティン大学では日本語クラブの生徒を対象に、またヘイルスクールでは Year 9,10 の生徒（日本の中学3年、高校1年に該当）を対象に英語落語会を実施、

（2年目）

期間：2016年8月13日～21日、訪問場所：兵庫文化交流センター、カーティン大学、ヘイルスクール、ウィレットン高校、ロスモイン高校
内容：「英語による落語の紹介」「英語落語2～3席」「現地生徒による英語落語（小噺）体験」など
→昨年の内容に加え、公立高校であるウィレットン高校、ロスモイン高校を訪問し、Year 9,10,11 の生徒に「日本語」の授業の中で「落語」を紹介。数人の生徒には「英語による小噺、落語の仕草」を体験してもらう。

（3年目）

期間：2017年8月9日～19日、訪問場所：兵庫文化交流センター、カーティン大学、ウィレットン高校、ロスモイン高校
内容：「英語による落語の紹介」「英語落語2～3席」「現地生徒による日本語落語（小噺）発表会」など

→昨年の内容に加え、ウィレットン高校、ロスモイン高校の「日本語」の授業を担当。基本的な日本語による落語小話のテキストを使用し、日本語による落語（小噺）を練習。最後には発表会を行った。

4. 授業実践とアンケート結果

昨年8月、3度目のパース訪問で行った「落語（小噺）」を使った日本語の授業のテキスト（図参照）と大まかな流れは次のようである。

-STEP 1- 英語落語の台本をアレンジしたテキストを使用し、日本語の基本表現を学習（図は「命令文」）。

-STEP 2- 基本表現を使った落語（小噺）をまず英語で練習しながら内容確認。

-STEP 3- 日本語での落語（小噺）練習。

（全体での練習→グループで練習→代表者の選出）

-STEP 4- 代表者によるクラス発表会。

対象は日本の中学3年生～高校2年生にあたる Year 9～12で、各学年の日本語学習到達度に応じて、8種類のテキストを用意した。アンケート結果が示すとおり、どの学年・生徒も楽しみながら、落語による日本語学習が体験できたようである。

オーストラリアの日本語教育は、日本における英語教育と同様、盛んであるが、その指導方法はより実践的なものである。第2外国語は日本語、中国語、フランス語ドイツ語などからの選択制であるが、日本の学習指導要領にあたる School Curriculum and Standards Authority は州ごとに定められている。パースの公立高校は西オーストラリア州教育省の管轄である。「言語(Language)」の項目にはその目標として「言語に対する知識・理解・技術を高める」ために7項目が掲げられているが、言語活動を行うこと、文化の背景を理解すること、多様性を尊重することなど、ほとんど日本と変わらないようである。

今回、落語の授業を受講した生徒は、右表に示すとおり、ウィレットン高校73名、ロスモイン高校92名、計165名の日本語選択者である。どちらの高校とも、どの学年も、男子より女子の数が多くは興味深い。これらの生徒たちに、授業後、下のような10問のアンケートを実施した。質問はすべて4段階の選択

Laugh & Learn Japanese in Short Rakugo!!

Lesson 4 Imperatives 「～しなさい」

～(Infinitive without to), 「～しなさい」
cf. Don't + ～(Infinitive without to), 「～するな」

Imperative expression is translated 「～しなさい」[～shi-nasai]. For negative imperatives, beginning with Don't or 'Never', we use 「～するな」[～sunu-na]. More polite expressions, 'Please ～' and 'Please do not ～', are 「～してください」[～shite kudasai] and 「～しないでください」[～shinaide kudasai].

「～しなさい」[～shi-nasai], ～してください[～shite-kudasai]]
Take off your shoes in the Tatami room. (たたみのへやでは くつ を ぬぎなさい)
Tatami no heya de wa kutsu wo nugi-nasai
 cf. 「～するな」[～sunu-na], ～しないでください[～shinaide-kudasai]]
Don't wash yourself in the bathtub. (バスで からだを あらわないでください)
Basu-tubu de karada wo arawa-naidekudasai

<Let's Enjoy Rakugo!>

Patient: Doctor, I have pain all over my body.
Doctor: Oh, that's too bad. Let me check. First, **touch** your head.
P: (Touching his head) Ouch!
D: Next, **touch** your chest.
P: (Touching his chest) Ouch!!
D: **Touch** your knee.
P: (Touching his knee) Ouch!!!
D: Let me see... Now I'm sure, your finger is broken.

(In Japanese)
Patient: 先生[せんせい], からだじゅうが痛[いた]いです。
Doctor: それはいけない。しらべてみましょう。はじめに、頭[あたま]をさわって。
P: (Touching his head) いたい!!
D: つぎ、胸[むね]をさわって。
P: (Touching his chest) いたい!!
D: ひざをさわって。
P: (Touching his knee) いたい!!
D: うーん、こりや、指[ゆび]がおれてますな。

(Words & Phrases)
 Doctor 「せんせい」[sensei] ※ We use 'sensei' rather than 'teta' when we call him/her.
 all over ～ 「じゅう」[juu]
 Touch ～ 「～をさわって(ください)」 [～wo sawatte (kudasai)] ※ 'kudasai' can be omitted.
 ※ 'Sawari-nasai' sounds too strong in this situation.
 ○○ is broken. 「○○ (の ほね) [hone(=bone)] がおれている」[ga orete iru]

2017 SURVEY on Rakugo Class in Japanese

Willetton S.H.S.			
W-Y9 Boys	W-Y9 Girls	W-Year 9	Total
10	19	29	73
W-Y10 Boys	W-Y10 Girls	W-Year 10	
19	25	44	

Rossmoyne S.H.S.			
R-Y10 Boys	R-Y10 Girls	R-Year 10	Total
13	20	33	92
R-Y10+ Boys	R-Y10+ Girls	R-Year 10+	
12	7	19	
R-Y11 Boys	R-Y11 Girls	R-Year 11	
5	20	25	
R-Y12 Boys	R-Y12 Girls	R-Year 12	
2	13	15	

SURVEY on Rakugo Class in Japanese

I About your Japanese Learning

Aug. 2017

- ① Do you like Japanese learning?
- ② Are you good at Japanese?
- ③ What area are you good at?
a. Listening b. Speaking c. Reading d. Writing
- ④ How much do you want to master Japanese in the future?

II About Rakugo class

- ⑤ Did you enjoy Rakugo class?
- ⑥ Did you understand the story in Japanese?
- ⑦ Did you understand the punch line in English? (why the story is funny?)
- ⑧ Did you try hard to perform Rakugo?
- ⑨ Do you think Rakugo is helpful for your Japanese learning?
- ⑩ Do you want to take Rakugo class again?

式で答えてもらい、学校ごと、学年ごとに集計し、その結果を比較した。

どちらの学校の生徒も、

- ① 90%以上が日本語学習に興味がある
- ② 60～70%は日本語が得意であると答えている。また、4領域については
- ③ 苦手な順に「話すこと」→「聞くこと」→「書くこと」→「読むこと」となっており、日本と比べ数段オーラル重視の授業を受けていると思われるパースの生徒でさえ、Communication 力に対する苦手意識が現れている。

次に、「落語」の授業についての回答を見てみると

- ⑤ 95%以上が授業を楽しんだ
- ⑨ 90%が日本語学習に役立った
- ⑩ 約90%がまた受けてみたいと答えている。

アンケートの結果を見る限り、パースの生徒たちは「落語」の授業にかなりの好印象を持ってくれたと言える。今回の授業はあくまでもワンショットであり、私たちの訪問もゲストティーチャー的な扱いだったので、これらの結果により、日本語の授業に「落語」が効果的であると結論づけることはできない。しかしながら、これからの日本語指導のひとつの方法の「落語」の持つ可能性を知る上では貴重なデータになったのではないかと考えられる。

5. まとめ

アマチュア落語家として「英語落語」に取り組み始めて、10年が過ぎた。1984年に落語家桂枝雀師によって始められた「英語落語」は、当初、古典落語を英訳したものがほとんどであったが、その後、さまざまな演者に受け継がれていく中で、今日で

は中学校や高等学校の教科書にも掲載されるようになった。なかでも、「英語落語小噺」はコンパクトでありながら落語の長所を受け継いだ格好の英語学習テキストであり、今後、教材としての可能性は大きい。落語を覚えて発表することは、単なる英文暗唱とは異なり、「言葉に感情を乗せる」こと、「聞き手に伝える」こと、2つの必然性を持っている。私たちは「英語落語」を通した英語指導を“Solo Acting Method”と名づけ、現場の生徒のニーズに合うように既製の台本にアレンジを加えたり、オリジナルなものを作成したりしながら、毎日の教育現場で実践している。今後は、さまざまなかたちの事例研究・数値データを通して、その有用性を追究していきたいと思っている。筆者は、「日本語教育」は専門領域ではないが、今後も海外へのボランティア訪問は継続していきたい、その中で落語文化を普及させるとともに、海外での「日本語教育」に新たな貢献ができることを目標としている。

参考文献

- 文部科学省 (2009) 「高等学校学習指導要領解説 (外国語・英語)」 p. 19
 藤澤良行・北川千穂 (2010) 「学生の『自信力』を育てる「英語落語」」 JASET全国大会要綱49, pp. 148-149, 2010
 阪田昌樹 (2010) 「英語落語が生徒の英語発表に対する態度の向上に及ぼす効果」 神戸市外国語大学修士論文
 外務省ホームページ (2016) 「諸外国・地域の学校情報 オーストラリア」

http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/02pacific/infoC20100.html

Government of West Australia, School Curriculum and Standards Authority, (2017)

https://k10outline.scsa.wa.edu.au/_data/assets/pdf_file/0010/407647/Japanese-Second-Language-Curriculum-Pre-primary-to-Year-10.PDF

